

第15回動物考古学研究集会の開催

2011年11月26・27日、平城宮跡資料館の講堂において「第15回動物考古学研究集会」が開催されました。

動物考古学とは、遺跡から出土する動物の骨から「人間が動物をどのように利用してきたのか」という、人間と動物との関わり合いの歴史を明らかにする研究分野です。動物考古学研究集会は、動物考古学に携わる研究者や学生が中心となって、研究成果を発表する場として毎年開催されており、奈良文化財研究所で開催されるのは9年ぶりになります。

今回の研究集会には54名の参加者があり、2日間にわたって、特別講演1件、口頭発表15件、ポスター発表11件の発表がおこなわれました。

特別講演では、松井章埋蔵文化財センター長が「歴史時代の動物考古学」と題して、古代における肉食や皮鞣しなど、これまで奈文研で進めてきた研究に関する発表をおこないました。口頭発表やポスター発表では、縄文時代から近世まで、動物に関わる幅広い内容の研究成果が数多く発表されました。また、日本国内の研究だけではなく、韓国や中国などの海外の研究や、民族考古学の調査報告といった興味深い研究成果も報告され、例年以上に多彩な内容の研究集会となりました。研究集会後の懇親会でも、発表者と参加者の間で、活発な討論や情報交換がなされました。

なお、今回の研究集会において、奈文研も参加する東日本大震災における「文化財レスキュー事業」への寄付金を募り、会場に来られた多くの方々にご協力を頂きました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。（埋蔵文化財センター 山崎 健）



研究集会の様子

退職のひとこと

夢醒めてみれば、、、

昭和51年の春、私は奈良文化財研究所に入所しました。それまで続いていた複数採用の最後の年でした。小林謙一、巽淳一郎、清水真一の諸氏が同期生でしたが、皆さん私よりも一足早く奈文研を去られました。当時は皆まだ20代の若さで、中でも私は右も左もわきまえない最年少者でしたので、いろいろと面倒をおかけしたことをほろ苦く思い出します。発掘調査も、まだバブルの最末期で、3カ月現場、3,000～4,000㎡ほどが普通で、作業員も15人班の4班体制でした。地元採用の作業員、全60人で、作業長、副作業長、班長4名、2名ずつの副班長とヒエラルキーが整っており、今思えばいろんな意味で凄い活力にあふれた現場だったような気がします。ただ調査員のありようは、私の独断的感想ですが、全般的に余り統率されていない個人主義的行動パターンが色濃かったのではなかったかと、自省をかねて思い起こしています。

私自身は、とにかく訳がわからないままに、無我夢中で過ごしてきたというのが実感です。平城第二調査室から第一へ、そして藤原第一から第二、飛鳥資料館、平城第一と移り、その先は文化庁。6年ぶり奈良に帰還し平城第三から第一に移り藤原へ行き国際遺跡研究室へと経巡り、最後は振り出しの平城でアガリという、むしろめまぐるしい奈文研人生でした。ついに居所定めがたしというところで、いろんなことがありましたが、夢から目覚めてみれば、36年前のあの頃と同じ心象風景の中に佇んでいるかのようです。

もう一度繰り返してみたいかな？

いや、もう十分だな。（副所長 井上 和人）



飛鳥資料館で作業する執筆者（1985）